

5.保健衛生・安全対策

HA1.保健計画の作成と活用

HA1-4

保健活動の記録と評価

— 身体計測とその記録、評価について —

東京家政大学
細井 香



保健活動の記録の種類

- 入園児健康調査表
- 個人の健康記録表（園児、職員）
 - ・各種健診結果、アレルギー、受診状況、健康状態の記録など
- 事故報告書
- 緊急時個別対応票
- 健康診断記録表
- 保健総括（延べ欠席数と内訳、感染症の内訳と発生人数、与薬件数、健康診断報告、保健室利用状況、保健指導等）
- 年間保健計画

健康状態の記録

【個人記録】

- 欠席理由
- 健康状態
- 発育発達（身体計測の記録）
- 保育中の体調に変化がみられた場合の対応
- 気になること など

【クラス別の記録】 ＊職員全体で把握できるように

- 園児の体質（慢性疾患、食物アレルギーの原因物質等）
- 個別に配慮が必要な事項（熱性けいれん時の指示等） など

身体計測の方法

身体計測について

- 身体計測を行うことにより、乳幼児の身体発育、栄養状態を簡易かつ客観的に評価できる。
- 10年ごとに厚生労働省が作成する「乳幼児身体発育値」を用いて、判定基準とする。
- 一般に子どもの発育には個人差があり、さまざまな要因が関与するため、1回の計測で判断するのではなく、定期的・継続的な計測・観察等により総合的に評価することが重要である。
- 計測と同時に全身状態の観察を行うことで、虐待を受けている兆候の有無の観察になる。

乳幼児における計測器具

①体重計

体重計は、10g単位以内のものを準備する。体重計は、必ず事前に検査し、目盛りなどのくいを調整しておくこと。

②身長計

乳幼児用（仰臥位式）及び学童用または一般用を準備する。それぞれ尺柱などが正しく直角であり、移動板がなめらかにすべるようなものを準備する。

③巻尺（頭面、胸囲計測に使用）

ガラス繊維入りの合成樹脂製のもので、JIS規格のものを準備する。金属製の巻尺は危険を伴うことがあるので使用しない。

計測の一般的注意事項

- ①計測者は、計測の目的をよく理解し、正しい手技によって正確な計測を行う。
- ②計測した値が通常の値と著しく異なる場合は、再度計測して間違いがないことを確認する。
- ③計測値を調査票に記入するときは、計測者が目盛を読み、記入者はその値を復唱しながら記入する。

乳児と幼児の体重測定の方法

原則、

生後1カ月未満では週2回
生後6カ月未満では週1回
生後6カ月から1歳未満では2週に1回
1歳以降では月1回測定する。

体重測定時の留意点

- ①乳児は、授乳直後の計測はさける。幼児は、事前に排便、排尿をすませておく。
- ②原則として全裸で計測する。
- ③寒くないように、室温を調節しておく。
- ④体重計は、水平で固い場所に置く。
- ⑤測定する前には体重計の目盛りが0になっているか確かめる。



乳児（2歳未満）の体重測定

- ①乳児を仰向けか座位で秤台か、かごにのせる。その際、布などを敷いておくとうい。おむつを敷いたり、乳児を布でつつんで計測するときは、その重量を差し引く。
- ②体重計の中央に乳児を静かにのせ、指針が静止してから目盛りを読む。
- ③乳児は計測の際、泣きあばれることが多いが、一瞬力を抜くときがあるので、このときの静止した状態での数値を読みとるようにする。
- ④計測の単位は少なくとも10g単位までとする。ただし、デジタル式体重計で数値が表示される場合はその値を記入する。



幼児（2歳以上）の体重測定

- ①2歳以上の幼児は台秤に正しく立たせて計測する。
- ②体重計の中央に両足を乗せ、まっすぐに前を向いて立たせる。
- ③体重計の針が静止してから目盛りを読む。
- ④計測の単位は少なくとも10g単位までとする。ただし、デジタル式体重計で数値が表示される場合はその値を記入する。



乳児と幼児の身長測定の方法

身長測定の場合、2歳未満の場合と2歳以上とでは測定方法が異なるので注意する。

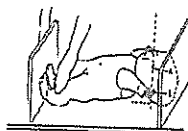
原則、乳児期は月に1回、幼児期は1～3か月に1回測定する。

身長測定時の留意点

- ①寒くないように、室温を調節しておく。
- ②身長計は、水平で固い場所に置く。
- ③尺注が水平で、移動版がなめらかに動くか確認しておく。
- ④1mm単位まで計測する。

乳児（2歳未満）の身長測定

- ①全裸にした乳児を仰向けにして、身長計の台板上に寝かせる。その時、固定板に頭側、移動板に足側がくるようにする。
- ②補助者は、乳児の頭頂点を固定板につけ、耳眼面（耳珠点と眼高点とがつくる平面）が台板と垂直になるように頭部を保持する。
- ③計測者は乳児の片側に立ち、乳児の顔に近い方の手で乳児の高際を軽く台板におさえて下肢を伸展させる。
- ④もう一方の手で移動板をすべらせて乳児の足のうらにあて、足のうらが台と垂直な平面をなすようにする。



図表(14)と表(表1)とを同じ位置に固定板(固定板)と移動板(移動板)とを同じ位置にします。図では両板が接触するのを示しています。



2歳以上の幼児の身長測定

- ①全裸か又はパンツ1枚にして、学童用または普通の身長計を用いて尺柱を背に直立させて計測する。
- ②足先は30°くらいの角度に開き、踵、臀部、胸背部が一直線に尺柱に接するようにする。胸をあまり張らないようにし、腹部をひかせることよい。また、両上肢はかかる手のひらを内側に自然に垂らす。
- ③頭はひき、眼は水平の正面を見るようにする。耳珠点と眼高点がつくる平面が水平になるようにする。補助者が幼児の顔面と同じくらいの高さから話しかけてやるとよい。このとき、後頭部は必ずしも尺柱につかないこともあるので、強く押しつけないようにする。
- ④計測者は児の片側に立って、可動水平桿を一方の手で静かに下げて、かたく頭頂部にぶれて目盛を読む。
- ⑤立位での測定がどうしても無理な場合は測定不能とする。寝かせての測定は不可。



図10-10-1 身長計測の姿勢

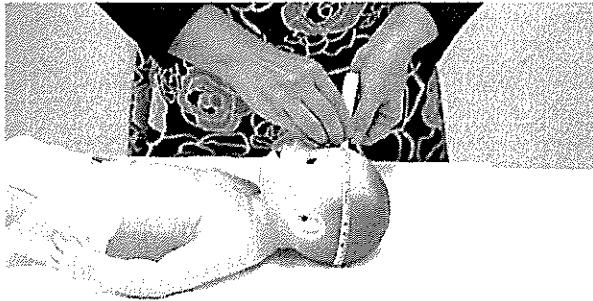


図10-10-2 胸囲計測の姿勢

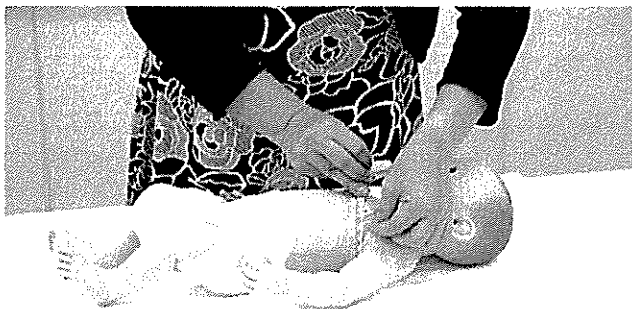
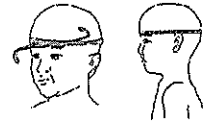


図10-10-3 頭囲計測の姿勢

頭囲測定

①2歳未満の乳幼児は仰臥位で、2歳以上の幼児は立位または立位で、計測する。ただし、泣きあはれる場合は母親や付添人が抱いた状態でもよい。



②計測者は一方の手に巻尺の0点を持ち、他方の手で後頭部が一番突出しているところを確認してあて、左右の高さを同じくらいになるようにしながら前頭部にまわって交差し、前頭部の左右の眉の直上を通る周長を計測する。このときの注意点は、ひたいの突出部でなく眉の直上を通ること。

③1mm単位まで計測する。

胸囲測定

①上半身を裸にし、2歳未満の乳幼児は仰臥位で、2歳以上の幼児は立位で計測する。

②胸線を軽く側方に開かせ、片手に巻尺を持ち、巻尺の背面から前方に通す。巻尺は左右の乳頭点を通り、体軸に垂直な平面内にあるようにする。

③巻尺は強くしめず、皮膚面からずり落ちない程度とする。

④計測値を読むときは自然の呼吸をしているときに呼気と吸気の間中であることとする。泣いているときは避ける。また、幼児は胸に力を入れることがあるので、このようなときは話しかけたりして緊張をやわらげるとよい。

⑤1mm単位まで計測する。



図10-10-4 胸囲計測の姿勢

身体計測の評価

- 身長、体重、頭囲、胸囲計測の結果は、乳幼児身体発育曲線を用いて、パーセンタイル値で判定する。
- 発育曲線に計測結果をプロットして折れ線をつなぐことにより、子どもの発育状態を客観的に判断することができる。
- 成長速度は折れ線の傾きから把握できる。発育曲線のカーブに添って発育しているか、また、個人差も考慮しながらその子なりのペースで発育しているかを確認する。
- 継続的に観察していく過程で、発育が長期間にわたって停滞していたり、極端な増加や減少傾向がみられるなど、発育曲線のラインからはずれていく場合は支援が必要。

男子 幼児身体発育曲線（イメージ図）

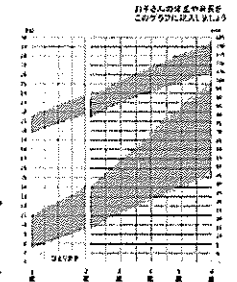


図10-10-5 身体計測の評価

評価する際の留意点

- 発育に影響を及ぼす要因として、食事、運動、睡眠などの生活習慣や、育児環境、出生状態や発育状況、遺伝など子ども自身の要因が影響するので、発育に問題がある場合には、いろいろな側面から状況を把握し、支援していく必要がある。
- 年間の身長の伸びが4cm以下の場合や、標準身長曲線で-2SD以下の場合、低身長が疑われますので、医療機関に相談する目安とする。低身長の原因には、ホルモン分泌異常や染色体異常、軟骨・骨の異常、心疾患などの内臓疾患、虐待などがあげられる。子どもの成長障害は早期発見、早期治療が重要ですので、適切な治療のタイミングをのがさないよう留意する。
- 身長の発育曲線には2歳時に段差が見られる。これは、乳幼児身体発育調査では、2歳未満は仰臥位（spine length）、2歳以上は立位（standing height）により計測を実施することとしているためである。よって、計測を行う際も、2歳未満は仰臥位、2歳以上は立位により計測するとよい。

図10-10-6 身体計測の評価

講座のまとめ

- 身体計測を行うことにより、乳幼児の身体発育、栄養状態を簡易かつ客観的に評価できる。
- 一般に子どもの発育には個人差があり、さまざまな要因が関与するため、1回の計測で判断するのではなく、定期的・継続的な計測・観察等により総合的に評価することが重要である。
- 正しい測定方法を学習し、測定の際は、誤差のないよう留意する。

図10-10-7 身体計測の評価

振り返りシート		受講日	年	月	日
研修を受けて 感じたこと、考えたこと					
チャレンジしたいこと、 改善していきたいこと等 (振り返り予定 月 日)					
振り返りと次の目標 (実施日 月 日)					